

海外研修レポート

平成23年8月1日(月)

1)訪問先

JICA事務所・日本大使館

2)研修内容

●JICAモンゴル事務所

磯貝所長よりモンゴルの最近の情勢や、JICAがモンゴルに対して行っている活動内容について伺ったとともに、今回の研修に対して、我々に対してどのようなことを期待しているかについても話していただいた。

岩井次長からは、日程と照らし合わせながら、JICAの活動の中でも、モンゴルにおける教育に関わる支援についての概略をお聞きした。その後、食べ物や飲み物に対する注意など、健康管理について聞く。

●在モンゴル日本国大使館

モンゴルに関して情勢をお聞きする。また、モンゴルに住む人々が、いかに親日感情が高いか、3月の東日本大震災でのモンゴルの対応を例に話していただいた。

●JICAモンゴル事務所

技術協力プロジェクト「子どもの発達を支援する指導法改善プロジェクトP2」について、担当者より活動の概要を聞く。無償「第4次初等教育施設改善計画」について、担当者より活動の概要を聞く。

3)所感

前夜遅くにウランバートル入りし、暗い中でホテルへチェックインしたため、この日初めてウランバートルを体感することとなる。大気汚染が問題になっているということであったが、ウランバートル市は、空が青く空気が乾燥していて、気温は高くても非常に爽やかで過ごしやすいという第1印象であった。交通量の多さには驚いたが、街は思っていたより活気があり、昼食にはさっそくモンゴル料理も堪能した。

そのような印象の中でJICA事務所および日本大使館での話を聞いていると、やはり観光している中では見えてこない課題があり、明日以降、どのような視点で視察にいけばよいのかが、具体的にイメージできた。

平成23年8月2日(火)

1)訪問先

ホテル→セトゲムジ統合学校→ガンダン寺→昼食→アジアの会→夕食→ホテル

2)研修内容

●セトゲムジ統合学校：施設見学→佐野、平野、西内、深沢、清水JVと意見交換会

●アジアの会：施設見学→子どもたちとの交流(折り紙、切り絵など)

●夕食：隊員の方々と食事会

3)所感

セトゲムジ統合学校では隊員の方々から、現場のお話を聞かせていただいた。熱心な先生方が増えてきてはいるが、詰め込み式の教育が続いている学校も少なくはないとのこと。「子どもらしさがつぶされている」と佐野隊員。

子どもが書いたお母さんへの手紙の話(ほぼ全員が同じような内容を書く)を聞いたときは驚きを通り越して、恐ろしさを感じてしまった。学校を出る時には、水汲みに向かう少年と出会った。ガンダン寺では1年生くらいの少女がひとりぼっちで、鳩のえさを売っていた。

アジアの会では、子どもたちと楽しい時間を過ごすことができた。とても人懐っこく「ツル」「アリガトウ」と日本語で私

ちに話しかけてくれた。純粹に嬉しかった。

様々な「子どもたちの姿」を感じた1日だった。子どもたちに出会う度に「今この子どもたちのために、私は何ができるのか」と悩んでしまう自分がいた。



水を汲みに向かう少年



鶴, 完成! (アジアの会にて)



セトゲムジ周辺の様子

平成23年8月3日(水)

1)訪問先

ホテル→ダルハンへ移動→ダルハン着、昼食→エネレル統合学校サマーキャンプ →エネレル統合学校 →レストラン→ダルハン市内の公園→ホテル

2)研修内容

●ホテル(ウランバートル) → ダルハンへ移動

この研修で初めてウランバートルを離れ、地方都市のダルハンへと向かった。

●エネレル統合学校サマーキャンプ訪問

青年海外協力隊の佐藤さんが活動しているエネレル統合学校のサマーキャンプを訪問。施設や学校の概要についての説明を受けた後、子どもたちと交流した。

●エネレル統合学校訪問

佐藤さん案内のもと、校内施設を見学。

●レストラン → ダルハン市内の公園 → ホテル(ダルハン)

佐藤さんとの夕食懇談会。食後、市内を一望できる公園に行って夜景を楽しんだ。

3)所感

目的地のダルハンは、ウランバートルから北へ約200km離れた場所に位置しており、到着までには4時間以上を要した。ウランバートルの喧噪を抜け出してからはひたすら広大な草原の中を走ったのだが、車窓からは放牧されている牛・羊など、ウランバートルでは見ることのできなかった「モンゴルらしさ」を実感できる風景をたっぷり堪能することができた。

訪問したサマーキャンプでは、身寄りのない子どもたちが共同生活をしながら夏休みを過ごしていた。到着するやスーテーツァイやお菓子などのもてなしを受けた。子どもたちも進んで手伝いをし、初対面の私達に笑顔を見せてくれた。ここにはスタッフ1名(このときはエネレル統合学校の養護教諭)が1ヶ月単位で泊まり込み、子どもたちの面倒を見ているという。また、この日帯同してくださった青年海外協力隊の佐藤さんは普段からこの施設に訪問して子どもたちと一緒に遊んだりしているだけあり、子どもたちから大人気で、頼れるお兄さん的な存在であった。

概要を聞いた後、いよいよ子どもたちとの交流。用意していた折り紙、剣玉、切り絵などをしたり、羊の骨を使った「シャガイ」を教わったりして楽しく過ごした。また、角野先生の学級の子供たちが作ったメッセージも贈呈。笑顔での交流ができた。そして近くの川にもみんなで行って、水遊びも。決してきれいとは言えない川に次々と飛び込んで

大はしゃぎする子どもたち。その姿からは、無邪気さとともにたくましさを感じた。佐藤さんの夕食懇談会では、現地での活動の様子を聞いた。子どもたちの成長を願い、強い思いを胸に活動している姿からは感銘を受けた。での活動の様子を聞いた。子どもたちの成長を願い、強い思いを胸に活動している姿からは感銘を受けた。



施設の様子。



菜園では野菜を育てている。



メッセージ贈呈。



元気に川遊び。

平成23年8月4日(木)

1)訪問先

ホテル(ダルハン)→NGO「太陽の子どもたち」(ダルハン)→昼食(ダルハン)→<ウランバートルへ移動>→夕食→ホテル(ウランバートル)

2)研修内容

●NGO「太陽の子どもたち」訪問

- ①施設長のサンジャーエレデネチョルーン先生から、施設の概要、施設の運営資金、施設における教育方針等について説明を受け、その後、質疑応答。
- ②施設の見学。(子どもが生活する部屋、施設で行われている教室などの施設見学、および、昼食準備の様子、日本語学習の様子なども見る事ができた。)
- ③施設に暮らす子どもたちと先生によるミニコンサートの鑑賞。
- ④子どもたちと、各自が自由に交流。

●昼食時、佐藤隊員から、「太陽の子どもたち」訪問等について意見交換。

3)所感

「太陽の子どもたち」は、孤児や様々な事情により親と暮らせない子どもを保護する施設である。主に日本や諸外国のNGOなどからの支援により運営されている。施設の敷地には子どもが生活をする棟の他に、芸術学校が併設されているのが特徴だ。施設で暮らしている40人の子どもたちは地域の学校に通うかわら、施設内の芸術学校で、歌や踊り、馬頭琴や琴、切り絵、アクロバットなどを学んでいる。これらのモンゴルの伝統的な芸能や芸術の技能を身につけることは、子どもたちの自信を育むとともに将来自立できる力を養うことになると、エレデネ所長は考えておられる。彼女は、以前、モンゴル子ども人権センターで子どもを保護する仕事をされていたが、資本主義経済移行後の経済の混乱にともなって急増したストリートチルドレンを支援するため、2001年に「太陽の子どもたち」を設立した。その時入所した20人の子どもたちは、17人が大学に進学、3人が企業に就職を果たしており、現在施設で生活する子どもたちも学業において優秀な成績をあげているそうだ。このような成果をあげているのは、施設のスタッフの皆さんが、子どもたちの自立する力・生きる力を養うことを共通の目標とし、養育・教育に熱心に取り組んでいるからだと感じた。

子どもの自立する力を養う手だての一つとして、子どもたちには生活の様々な場面で役割と責任が与えられている。食事の準備や掃除などは子どもが当番制で行っているそうだ。また、芸術学校で習得した技能を活かして日本などでコンサートを行い、活躍している(その収益が施設の運営費に充てられている)。子どもたちは自分の役割を果たしたり、身につけた技能を表現する機会をもったりすることにより、周囲から認められる経験を重ねている。このことが、



昼食の準備中

子ども達の自己肯定感や自己有用感を高めているのかもしれないと、彼らの生き生きとした表情を見て感じた。

私たちのためにもミニコンサートを開いてくださった。

子ども達の素晴らしいパフォーマンスと演技中に絶やされることのない笑顔に感銘を受けた。特に、モンゴルの「お母さんの歌」を歌う子どもたちの穏やかな表情と美しい歌声は、胸にせまるものがあった。厳しいバックグラウンドをもつ子どもたちは、それを感じさせない自信と誇りに満ちているように私の目には映った。



ミニコンサートでの踊り

エレデネさんは、日本からの支援に対し感謝の言葉を繰り返しておっしゃっていた。また、子どもたちの部屋には「日本のお父さん・お母さん」と書かれた写真が飾られていた。複数のNGOなどの団体の支援により支えられている施設では、一人でも多くの支援者を必要としている。このような状況の中で「太陽の子どもたち」では、ただ支援を待つのではなく、子ども達が勉学に励んだり芸能などの技能を高めたりすることにより、より多くの支援者を得ているようだ。そのことに、彼らの生きる力、たくましさを感じる。また、支援者も彼らから生きる力や喜びをもらっているのではないと思う。

東日本大震災後、「太陽の子どもたち」では、先生や子どもたちが日本への義援金を呼びかける活動を行うとともに、チャリティーコンサートを開いた。集まった義援金に、子ども達は自分に支給された政府からの生活保護金1ヶ月分を加え、日本大使館に届けてくれたそうだ。モンゴル研修中、日々、数々の日本へ寄せられた支援や見舞いの気持ちを知り、大変ありがたく、世界の人々とのつながりを改めて感じた。

平成23年8月5日(金)

1)訪問先

ホテル→セイブ・ザ・チルドレン・ジャパン事務所サイト訪問→技術協力プロジェクト「ウランバートル市廃棄物管理強化プロジェクト」プロジェクトサイト訪問→ホテル

2)研修内容

●セイブ・ザ・チルドレン・ジャパン

セイブ・ザ・チルドレンのモンゴルでの取組などを聞き、サイトでは子どもとの交流をさせていただいた。

●「ウランバートル市廃棄物管理強化プロジェクト」プロジェクトサイト

ウランバートルでのゴミの収集方法やゴミの処理方法などを聞き、実際のサイトを見学させていただいた。

3)所感

セイブ・ザ・チルドレン・ジャパンのモンゴル事務所を訪問させていただき、活動内容の紹介や実際のモンゴルの子どもたちが抱えている問題などをどう解決へと導くべきかを話あわせていただいた。モンゴルにはストリートチルドレンが現在およそ200人いるということだ。この機関では、様々な面から子どもへの支援を行っていた。社会福祉支援や教育・発達支援などである。子どもへの支援は、様々な面から必要とされている。何が必要で、どうすべきであるのか、日本に帰ってから、もう一度子どもたちと向き合おうと思った。

午後からの「ウランバートル市廃棄物管理強化プロジェクト」プロジェクトサイトの訪問では、実際のゴミ処理方法やウランバートルのゴミ問題についてもお話をさせていただいた。ランドフィルターという、持ってきたゴミを埋め、土をかぶせ押すというゴミの処理方法をとっているそうだ。モンゴルは乾燥しているため、土をかぶせ押さなければ飛んでしまうという。分別についても、家庭内では分別はしないそうだ。一定のゴミ収集所に集められ、それをウエストピッカーたちが分別していた。生きるということは今一度考え直すきっかけとなるような光景だった。

平成23年8月6日(土)

1) 訪問先：ホテル→ホームステイ先

2) 研修内容：ホームステイ／遊牧生活体験

3) 所感



旅の安全を祈る



これぞ!モンゴル!



広~~~~い!台所

ウランバートルから2時間かけ、ホームステイ先へ。「これは道なのか!?!」というオフロードを走り到着。みんな「運転手さんは、なぜ道がわかるのか」と感心。

それまでずっと一緒にいた他の先生方と離れるので少し不安に…なったのは一瞬。これぞモンゴル!青い空、どこまでも続く草原。首都やダルハンで「私の想像してたモンゴルと違う…」と思うことばかりだったので、うきうきわくわく。

ホームステイ先に着くと、さっそくスーテーツァイを飲ませていただいた。スーテーツァイと一緒に出てきたのが足…というか「ひづめ」びっくりしながらも食べてみると美味。他にも羊の脂や、頭部。びっくりするものがたくさん。一番驚いたのは赤ちゃんがおしゃぶりの代わりに羊のあぶらをチュパチュパしていたこと。モンゴルの赤ちゃんにも「いないないばあ」が通じたこと。違いがあれば、共通点もあってとてもおもしろい。

乗馬体験。17歳のチムゲーが3人分の手綱を引っ張って指導してくれた。チムゲーは5歳の時には馬を乗りこなしていたようだ。夢は、おばあちゃんの後を継ぐこと。モンゴル語がまったくできない私たちに必死で話しかけてくれる姿が印象的であった。

食事はボーズ(肉まん)やゴリルタェシュル(肉うどん)をいただいた。小さなお鍋を使ってあつという間に料理してしまうおばあちゃんの姿はとっても格好良かった。

心配していたトイレも、1回やっしまえば慣れた。ゲルスタイ1日目終了。

平成23年8月7日(日)

1) 訪問先：ホームステイ先→ホテル

2) 研修内容：ホームステイ／遊牧生活体験

3) 所感

ホームステイ2日目。昨晚「耳に入って、耳の中で死ぬ虫がいる」と言われ、綿を渡され…耳に詰めて寝た私たち。顔の辺りをブンブン飛び回るハエの音で目が覚めると、17歳のチムゲーが家畜を放し、掃除を始めていた。日本にこんな働き者の17歳はいるだろうか。私が17歳の時は自分の部屋の掃除で精一杯だったと思う。

携帯電話で話をしながらガスコンロを使って料理するおばあちゃん。とても不思議な光景だった。車もあるし、オートバイもある。携帯電話の充電もできて、テレビも見える(お父さんはドラマを見るのが日課)。また私のイメージと違うモンゴルがあった。

夏休みが終わると、おばあちゃん以外のみんなはウランバートルへ戻るようだ。おばあちゃんは「ひとりぼっちになっても、私はここがいい。ウランバートルなんかじゃ眠れないよ」と話してくれた。携帯電話やガスコンロを使っても変えたくないもの、捨てられないものがここにはあるのだろうか…と感じた。



ボーズ(肉まん)



乳搾り



海を渡ったボンジュース



二日目も乗馬体験



民族衣装(デール)

平成23年8月8日(月)

1) 訪問先：新モンゴル高校、第97学校、JICAモンゴル事務所

2) 研修内容

●新モンゴル高校(ウランバートル)

青年海外協力隊の方々と合流し、校長先生から学校について紹介していただいた。その後校内施設やサマーカーキャンプの様子を見学し、各グループに分かれ現地のモンゴル人教員と意見交換を行った。昼食は校内で出されている給食をいただいた。

●第97学校(ウランバートル)

校長先生からの学校紹介の後、校舎内を案内していただいた。

●JICAモンゴル事務所

これまでの研修の振り返りミーティングを行った。各自がモンゴルについて感じたこと、また生徒に何を伝えたいかなどについて情報交換をした。

3) 所感

新モンゴル高校は、日本とモンゴルの教育を合わせた独自のカリキュラムを導入している。特に日本語や英語などの外国語教育に力を入れており、高校生になると日本の高校で用いている教材を使用し学習していた。卒業後は日本などの国外へ留学をする生徒が多く、モンゴル国内外を問わず活躍している。

現地教員と意見交換をする中で、教員の教育に対する意識や向上心の高さを感じる事ができた。学校では年に一人、研修として日本の大学へ教員を送っており、教員を育成する制度も充実しているように感じられた。

現在青年海外協力隊が2名派遣されている第97学校では、校長先生からの学校紹介の後、施設内を案内していただいた。ここ



卒業生の進路(日本の大学)



校内で使用されている教科書の一部

はJICAの指導法改善プロジェクトのモデル校となっており、子ども中心の指導法に積極的に取り組んでいた。その充実のために教員同士でも授業見学や研究授業などを行い、指導力の向上に努めている様子であった。

残念ながら夏休み中であつたため生徒の様子を見ることができなかったが、丁寧な学校紹介や施設見学を通して、モンゴルの学校の様子について学ぶことができた。



授業見学を行った表



教室の様子



JICAモンゴル事務所では、今回の研修の振り返りミーティングを行った。お互いが感じたモンゴルという国に対して意見交換を行うことによって、一人では見えてこなかった視点からもう一度この研修を見つめなおすことができた。また帰国後、お互いに生徒たちに何を伝えていきたいかをはっきりと見つけられた。

平成23年8月9日(火)

1)訪問先

ホテル→JICAモンゴル事務所訪問→日本人墓地跡→ザイサン・トルゴイ市内視察→チェックアウト→チンギスハーン空港→仁川空港

2)研修内容

日本人墓地跡、ザイサン・トルゴイ

→戦争という枠組みの中で、それぞれの建物に込められている想いをくみ取ろうとつとめた。

3)所感

あっという間の10日間だった。モンゴル事務所では所長さんと話をさせていただいた。モンゴルは親日国であることを実感したことを伝え、日本側がもっとモンゴルについて知ることが必要だと感じた。



日本人墓地跡



ザイサン・トルゴイ

市内視察ではそれぞれが思い思いの場所へ足を運び、最終日を終えた。また、日本人墓地跡、ザイサン・トルゴイ、それぞれの場所で「戦争」という言葉への思いが強く残った。8月6日、9日は広島・長崎の原爆投下の日であったこともあり、それぞれが「戦争」への思いを持ち、それぞれの場所を訪問した。命の尊さを改めて感じる事ができた。

※海外研修レポートは参加教員の皆さんが分担して作成しました。

参加者氏名

| 名 前 | 県 名 | 所属学校名 |
|-----------------------|-----|-------------|
| ふた おか ひろ ゆき 二岡 裕 幸 | 高知 | 黒潮町立入野小学校 |
| すみ の ゆ か 角野 由 佳 | 徳島 | 美馬市立江原南小学校 |
| かわ はら しい こ 川原 恵 子 | 徳島 | 徳島県国際交流協会 |
| はな ざき よし のり 鼻崎 吉 則 | 愛媛 | 松山市立味生第二小学校 |
| あ だち さち 足立 さ ち | 愛媛 | 伊予市立伊予中学校 |
| いの うえ しょう こ 井上 省 吾 | 愛媛 | 宇和島市立城北中学校 |

※敬称略

同行者よりメッセージ

サエンバイノ〜(モンゴル語で「こんにちは」)!この夏、四国各地から集まった6名の先生方とともにモンゴルを訪れました。自分自身にとっても初めてのモンゴル。何が待ち受けているか、期待と不安が入り混じったスタートでしたが、たった10日間とは思えないくらい充実した時間を過ごすことができました。

シンプルで無駄のない遊牧民の生活、ゆったりとした時間の流れ、生きることに向き姿勢、家族のきずな、また、東日本大震災後のエピソードを通じて知ったモンゴルの人たちの温かい気持ちなど、モンゴルの持つたくさんの魅力に出会うことができました。中でも、ほっぺたを赤くした子どもたちのきらきらと、どこか懐かしい笑顔、そして、その笑顔と向かい合っていた6人の先生方の生き生きとした姿がずっと心に残っています。どんなに疲れていても、体調が悪くても、子どもたちと一緒にいるときは、どこからか新しいエネルギーが溢れてくるように見えました。また、モンゴルの自然や文化、人々との触れ合いを通して、発見したことや感じたことをどのように生徒さんたちに伝えようかと頭を悩ませ、熱心に教材を探す先生方と行動をともにし、先生方の思いの先にいる生徒さんたちに出会ってみたい、目を輝かせて学ぶ生徒さんたちの顔が見たい、という気持ちが日々強くなっていきました。そして、自分自身もこの経験を今後の活動に活かしていこうと改めて決意しました。

この報告書には、モンゴルの魅力とともに、先生方の熱い思いや工夫がいっぱい詰まっています。ぜひご覧ください。今後も、この素晴らしい学びの機会がより多くの生徒さんたちに届けられるのを楽しみにしています。今回の研修を通して得られた、たくさんの素敵な出会いに感謝の気持ちを込めて。

平成24年2月

JICA香川県国際協力推進員 山下 理香

